

弘前藩の南部領取締の経緯

三浦忠司

始めに

本稿は「奥羽諸藩の動向と没収地取締藩の考察（『明治維新における地方行政制度の展開―北奥県の解明を手がかりとして―』の（一）」（昭和五二年三月刊「青森県立三本木高等学校誌」）に続く、一連の地方行政制度の展開過程の分析作業の一つである。

前稿においては、（一）奥羽諸藩のうち、朝敵となった藩領地はどのような形で新政府の支配下に組み込まれていたか、（二）朝敵藩領地の取締に任ぜられた諸藩はどのような藩であったか、を不十分ながら検討した。

ここでは、その取締諸藩のうち、旧南部藩領の取締に任命された弘前藩がどのような経緯を経て没収地取締に任ぜられ、それが何故に罷免されたかを原史料を引用することによって分析検討しようというものである。そして、そこには中央政府の地方統治に対するいかなる施策が反映されていたか、またそこにはいかなる地方特有の事情があったか、ということをあわせて検討しようというものである。

このことは明治中央政府はどのように地方統治を行なおうと考えていたか、また封建的藩制度をいかにして変革していこうとしてい

たかを考える上で、重要な指標となるものである。

明治新政府は戊辰東北戦争に勝利すると、その朝敵藩領地を没収して新政府の直轄領地とし、そこに県を新設して中央集権的地方行政制度を展開しようとした。そこで、その手始めとして、没収地に勤王諸藩を取締藩として発令し、彼らの手によって「一先、人心之安堵つかまつり候処まで」（元年七月一七日付大久保利通宛木戸孝允書簡）民政取締を実施して段階的に旧来の地方統治を掌握しようとしていた。その取締藩に発令された藩の一つが弘前藩であった。

一、盛岡藩領地の没収

盛岡藩の支配地域は北郡・三戸郡・二戸郡・鹿角郡・九戸郡・岩手郡・志和郡・閉伊郡・稗貫郡・和賀郡の一〇郡を有する広大な領土であったが、戊辰東北戦争の結果、奥羽越列藩同盟に組みし、最後まで王師に抗したために、その封地二〇万石はことごとく没収されるに至った。

盛岡藩が官軍に降伏帰順を決めたのは明治元年九月二一日のこと

である。それまで秋田藩と鹿角口十二所をめぐる激しい攻防戦を展開していたが、列藩同盟の盟主たる仙台藩が帰順したとの報に接し、即時停戦を命じ、奥羽鎮撫総督府に謝罪嘆願を申し入れ、ようやく一〇月一〇日に至って謝罪嘆願が受理された。同日には、盛岡城が官軍に引渡され、藩主利剛・嫡子彦太郎は東京謹慎、戦争首謀者の捕縛、東京護送が命ぜられた。

元年一二月七日、東京芝の菩提寺金地院に謹慎中の南部利剛に対し、処罰が達せられた。処分の申渡は八戸藩家老津村大学を通して行なわれた。その内容は封地二〇万石の没収、藩主の東京謹慎、家名は新たに一三万石で立て下され、新地に転封を命ずるというものであった。

そして、奥羽の朝敵藩没収地には、同月七日付で奥羽民政取締として弘前藩を含む一〇の諸藩が命ぜられ、南部一〇郡の没収地には同月二三日、弘前藩（津軽越中守）、松代藩（真田信濃守）、松本藩（戸田丹波守）の三藩の取締が命ぜられた。北郡・三戸郡・二戸郡は弘前藩に、九戸郡・鹿角郡・閉伊郡・岩手郡・紫波郡・稗貫郡・和賀郡は松代藩と松本藩に分割取締されることになった。

南部彦太郎

其藩旧領別紙郷村高帳之通今般津軽越中守真田信濃守戸田丹波守

取締仰付候間早々城地引渡可申旨御沙汰候事

十二月

行政官

陸奥国 北郡

三戸郡

二戸郡

右者此度津軽越中守取締所被仰付候間郷村諸書物等引渡可申事

十二月

陸中国

九戸郡

鹿角郡

南部彦太郎

閉伊郡

岩手郡

紫波郡

稗貫郡

和賀郡

右者此度真田信濃守戸田丹波守取締被仰付候間郷村諸書物等引渡可申事

十二月

（青森県立図書館所蔵『近藤家文書』南部藩維新史料）

注

（1）

奥羽民政取締の担当であった木戸孝允の日記によると同月七日と二四日の項に御沙汰の様子が次のよう記されている。

七日 今日、奥羽諸藩御所致、大広間上段中央に議定阿波中納言正座、右側備前侍従大原□□、左側三岡、余、副島、大

南部彦太郎

木諸参与列席、中段右側に弁事田中五位、刑法判事中島、五位軍務判事香川敬三、右側に史官巖谷迂也相列す。親戚又は親戚家老のものを呼出し迂也詔書を拝誦す。畢て一同相退き再び一名宛呼出し、御所致の旨を申聞す。家老は中段外也。四字頃相済各復席す。

三等官已上。

二四日 朝、今日、奥羽府県の割、降伏諸藩へ更に賜りし土地等詮議相調、府県取締諸藩と降伏諸藩へ相渡す所の村帳調終る。

（日本史籍協会叢書『木戸孝允日記』）

二、弘前藩の南部領取締

弘前藩には明治元年十二月七日、次のような行政官布告が、東京留守居役三上定右衛門に達せられた。それは、弘前藩を奥羽御領の内民政取締に任じるとし、取締にあたつては民政に長じた家来を精選出張させるようにし、「新県御取建」の場所の検分を行なうようにとのことであつた。

明治元年十二月六日於東京表弁事役所より御呼出ニ付御留守居三上定右衛門罷出候処千種少将より御達ニ相成候御書付左ニ

津輕越中守

其方儀今般奥羽御領之内民政取締被仰付候ニ付てハ兵乱之余人

民愁苦之情態追々被聞召深く被為痛聖念候ニ付兼而民政相心得候家来精選之上彼地出張申付候朝廷之御政体ニ基人民撫育ニ厚く心を用御一新之御趣旨洽く貫徹致候様可取計旨御沙汰候事但出張地所之儀ハ府県掛可伺出事

十二月

行政官

今般家来之者奥羽出張之上ハ新県御取建之場所検分を遂ケ見込可申出候様可致事

（弘前市立図書館所蔵『弘前藩記録拾遺』）

弘前藩の戊辰戦争に果した役割は格別戦功をあげたわけではなかったが、秋田藩に続いて列藩同盟を脱退し、総督府の命を奉じて庄内・南部藩の討伐に軍兵を派遣した結果、戦後、「勤王殊功藩」としての待遇を受けることとなった。^①明治二年六月には一万石の賞典を下賜されている。

同月二四日、弁事役所から呼出された三上定右衛門は弁事役所にて四辻少将より次のような布令を達せられた。

津輕越中守

南部彦太郎旧領今般其藩へ取締被仰付候間別紙郷村高帳之通早々地処受取兼テ被仰出候御趣意ヲ奉体認取締方諸事行届候様可致旨御沙汰候事

十二月

行政官

覚

陸奥国

北郡 三戸郡 二戸郡

右郡の内高四万五千三百五十三石八斗四升郷村帳宅冊御下渡被仰付候

(国立国文学研究資料館史料館所蔵『津輕家文書』戊辰年間旧藩記事、第六)

それは南部藩旧領の内、北郡・三戸郡・二戸郡の三郡、石高にして四万五三三石八斗四升の地を弘前藩の取締に任じるというものであった。ここに弘前藩の南部領取締が始まることとなる。

弘前藩は新県施政の基本方針としての「諸藩取締奥羽各県当分御規則」の交付を受け、取締の準備を開始した。

東京出役の神東太郎は南部領取締の件につき、「実ニ大業ノ事ニ御座候。就テハ此表取調詮義向モ容易ニ無之、トテモ御留守居計ニテ行届兼候」^③とその取調事務の多忙さを国元へ知らせている。

東京と弘前との間の往復文書より南部領取締についての動向を示すと次のようになる。

一、松代藩・松本藩との間で「当分御規則」に示された取締の手續、権知県事・知県事の役職・職務等についての打合せ（二月二七日付東京発書状）^⑤

二、取調多忙のため東京出役の人員増員の要請、県知事選任にあつたての注意（二月二八日付東京発書状）

三、民政取締につき、松代藩の役人が東京に到着したので、当藩でも人選を急ぐようにとの連絡（一月一五日付東京発書状）

四、民政取締地所につき、松代藩の役人東京へ到着。政府の基本

方針が確定していないため、兵隊の派遣なども決っていない。政府は知府事を奥羽総取締として派遣する考えであるとの連絡（一月二四日付東京発書状）

一、政府の模様や諸藩打合せのため奉行を東京へ派遣、諸役人の人員、兵員の数などについて政府や取締諸藩との打合せ、政府の監察司派遣の依頼について取調、政府においては「大綱目は決定したが細部については決っていないので、松代・松本藩とともに政府に伺を立てる予定（一月二八日付東京発書状）」^⑥二年一月の段階では、東京留守居役を中心に取締にあたつての事務の準備を行なっているだけで、南部領へ役人を派遣して三郡引渡の交付を受けるところまでではない。ただ、三郡取締につき、旧盛岡藩に使者を派遣して取締の命を受けたとの言上を行なっている。松代藩らと比べるとその対応はきわめて鈍かった。

注

(1) 弘前藩の戊辰戦争時における動向とその後の藩政の動きについては、松尾正人「東北における維新変革の一形態」（『地方史研究』一三三号）に詳しい。

(2) 元年一月二三日頒布の「諸藩取締奥羽各県当分御規則」（『明治前期財政経済史料集成』第二卷「大蔵省沿革誌」上三六頁）は四力条にわたるもので、その内容は租税収納の旧慣維持、水害兵災の場合の半租免除、撫恤、官吏の給与、雑費金の使途などとなっている。これは諸藩取締地の民心安定を主

眼としたもので、旧来の領主的支配と何ら異なるものではなかった。

- (3) 『弘前藩記事(草)』「一二月二八日付東京府詰神東太郎より内状」弘前市立図書館所蔵、『旧藩記事』「二月二八日付東京出役神東太郎内状大意」史料館所蔵

- (4) これらの出典は、弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事』、『弘前藩記事(草)』と史料館所蔵『旧藩記事』である。

- (5) この書状によると弘前藩は「諸藩取締奥羽各県当分御規則」に示された内容について全く知識を持ち合わせていなかった。そこには旧態依然とした弘前藩の姿勢が見うけられる。

口上控

今度南部領御預被仰付候ニ付今二七日向寄類役共江出向き打合振大略取調口上控左ニ

問 真田信濃守様 横田数馬

一此度之御達向ニ付いかやふの御取調ニ相成居候哉毎度御行届之御次第も可被為有御内漏被成下度旨申候所

答

一御規則書二者大略手順も相纏ひまつ相分居丈爰許ニ而彼是取調向も難行届その儘昨二六日国許江御達書面之儘ニ而差下候旨

問

一権知県事とあるハ貴藩様ニ而者大抵は御役向被仰付御見込

御座候哉

答

一郡奉行の心得ニ而罷有候其已下右ニ類候役々何れも民政方心得候ものより遣候方と心得候旨

問

一知県事と申あり是ハ前ニ申上候権知県事の上役ヲ申さる可答

一何れ上役之様ニ見受候若シ書面二者相見得不申候得共此役のみ

朝廷より惣締として御居被成候哉といふもの可不分明

真田様組合 戸田丹波守様

一同家ニ而者真田様の触下ニ付定而進退心得居候事と様子承候所諸事手前江打合同様之相談ニ相成候趣ニ付別段戸田家江私儀出向き不申候

(略)

佐竹様 近藤良之進

問

一口上振真田様江申述候同断

答

一手前ニ而者国許江申遣候而モ難相分と心得候所より氣之付候丈爰許ニ而伺可申立と申をり

問

一定而御至当之御賢策も可有御座左すれハ御草稿而も御起ス

被成候也

答

一 さつと唯今取調中ニ御座候と申をり

問

一 左らハ御内実ニも無御座候ハバ御内々御調振拝見仕度手前ニ而も其辺江專相運候得共不案内之私何分考案も相成兼候体ニ付篤与拝見之上地所も遣候事なれハ御書面ニ向き取捨之上御覽考ヲ受用仕度と段々慕込候所されハ唯今下書之儘ニ罷有候得共懸御目やうとシブく持出候間さつと則座ニ写し別紙之通御座候さしたる美事も相見得不申候

問

一 真田様江打合候通知県事ト権知県事との差別を尋候処同じ役と心得候旨申聞候得共同官之事ニ者無之様両端ニ振分て罷有候得者如何と申候所なる程と申をり是以不分明ニ御座候多分権知県事より一段上役ヲ申さる様ニ相見得候口口候事

問

一 権知県事ハ何御役向被仰遣候やの事ヲ申候所いづれ国許の沙汰ニモ寄候得共まつ郡奉行之勤方と心得候旨
但真田佐竹ニ而も郡奉行ニ帰着仕候しかれハ御国許ニ而も郡奉行、勘定奉行等の政事の道ニ賢しき職向ニも可有御座候也役々割出しの員数ハ御規則書之通ニ而ハ中々以行届兼可申也の心得御座候外ニ御用人の耄人も参候もの可

(略)

右之通一通打合振取調申上候以上

一 二月二七日 三上定右衛門

(市立図書館所蔵『弘前藩記事』)

(6) 二月九日南部家老より来状左ニ

以書簡得貴意候然者旧領之内二戸郡三戸郡北郡共此般其御許様へ御取締所ニ被仰付候ニ就キ右御案内旁御使者被差越候段被入御念候儀奉存候右之趣東京表へ早速可申聞此段御報如斯ニ御座候

早々不宣

二月九日 戸来衆民 秀知

中野舍人

弘前 安長

西館宇膳様

大道寺族之助様

(史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七、市立図書館所蔵

『弘前藩記事(草)』)

三、弘前藩排斥運動

弘前藩の南部領取締の報が盛岡に到着したのは明治二年正月四日のことである。この報が伝えられると三郡の領民がいっせいに津軽氏排斥運動をくり広げた。正月中旬頃よりこの動きが活発化した。

排斥運動の趣旨は、「南部ハ白石へ国替、南部ハ不残津輕領ニ相

成可申。然れハ累代結怨之國柄故扱方モ同然津輕百姓南部百姓と分隔有之候様ニ相成可申。左候而ハ一同難堪且數百年來厚恩之君を余所ニ致し候儀百姓等一身ニ替十三万石之減少ハ不得止事ニ候得共、國替之儀ハ御免奉願上度、右不相成候ハ、天領ニ相成候様^①というきわめて決意の固いものであった。また、「津輕ハ我國旧來ノ仇ナリ。而シテ今日我殿様ニハ旧封ヲ減セラレ、併セテ他國ニ移サントス。而シテ南部ハ今改メテ津輕トナル。津輕ノ役人來テ吾等ヲ支配スレハ重來結怨ノ故ヲ以テ我ヲ見ルコト敵國ノ如クスヘシ。封土ヲ減スルモ猶可ナリ。國替ノ事ハ嘆願スヘシ事。若シ叶ハサレハ天領タルヲ願テ津輕領タルヲ欲セサルナリ。」^②というものであった。

弘前藩に伝えられた反対運動の第一報は正月一七日付の狩場沢番所の報告であつた。これ以後、弘前には一九日付七戸捨藏探索書、同付西館平馬内状、同付黒石表報知状、二一日付七戸捨藏探索書と続々と報じられた。

狩場沢番人の急進進状^③によると、「南部家御國替被仰付候儀ニ付、元成ニ致度右願之筋にて百姓共四万人程同意相企候内、昨日五十二人野辺地へ着致候由、今日又々二百人着之由ニテ寺々取片付置、右二百人ハ直ニ清水谷様へ嘆願ニ罷出、残り人数ハ野辺地ニ罷在、願筋相叶不申候上当番所ニテ差支候ハ、手始ニ焼払ヒ御本領迄乱入之趣風説ニ御座候。右多人數ハ百姓と申唱候得共士族共入交リ有之由」というものであつた。これは南部藩の國替に反対する百姓共が四万人、その代表者達が野辺地に詰めかけて野辺地駐屯の備州岡山藩に嘆願し、更に青森滞在の箱館府知事清水谷公考に嘆願しようとして

いたのである。もし、この願が聞き届けなければ、まず狩場沢番所を手始めに焼払い、津輕本領まで打って出ようというきわめて強硬な強訴であつた。

弘前藩ではこの報を受けて事の真偽を確めるために密偵を南部領に放つた。密偵七戸捨藏の報告は次のように記している。^④

「此度南部ハ津輕ニ相成候ニ付、去ル十六日七戸五戸三戸之十五人当所へ参リ、追々多人數相募リ参候由ニテ、寺一ヶ所取片付居リ、又々戦ニ相成可申ニ付、其覚悟可致旨申候」

津輕支配に反対する七戸・五戸・三戸の百姓達が野辺地に集まつて再び戦が始まるような不穏な形勢が醸じだされていた。

続けて同書は、備州隊長と同軍事局員の情報として、「一昨十七日七戸五戸三戸之百姓之旨ニテ十五六人、昨十八日五人相増、都合二十人当所へ詰懸ケ代官を以て申出ニハ嘆願之筋有之候ニ付引逢之儀申出候」――今日別ニ田名部より一人参候もの有之――と報じた。^⑤

正月二二日には、備前藩大口莊左衛門の七戸捨藏宛の書状が青森より送られてきた。それは南部の百姓が國替中止の嘆願書を清水谷へ取次いでくれるよう備前藩に依頼したというものであつた。^⑥

ここに至つて弘前藩は三郡統治に深い危機感を抱くこととなつた。三郡の領民をこれほどまでに激しい運動に駆り立てたのは何だったのであろうか。

それはまず南部対津輕という伝統的な反津輕感情^⑦があげられる。

嘆願書がいう如く、南部領取締はいずれの藩にても苦しからず、津輕弘前藩だけは御免こうむりたいという点に濃厚にあらわれている。

しかも、三戸・五戸・七戸・野辺地・下北と三郡全域にわたっており、かつ津軽氏反対を全面に掲げる点で、百姓・武士という階層を越えた純粋な感情がそこにはみられるのである。これが強硬にして、激しい運動を引き起こした第一の要因であろう。

しかし、その背景には士族の特権を失なった武士階級や地元給人らの動きも強く介在していたとみられる。その理由は、この運動は旧領主の国替中止も要求していることから、国替によって生計の途を断たれる武士層、中でも下級武士の強い生活上の危機感や準士族としての特権を失なう給人らの危機感がこの運動を強く推進した母体ではなからうか。⁽⁸⁾弘前藩の探索書に「右多人数ハ百姓と申唱候得共、士族共入交り」というのはこのことを物語るものであろう。又、三戸では、給人や下級武士達が中心になって同志を募り、⁽⁹⁾反津軽運動をおこなっているが、このことは単なる反津軽感情だけでは割切れないものである。

注

(1) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七、弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事(草)』中の「七戸捨蔵探索書」

なお、自らの郷村を焼き払ってでも津軽支配に反対し、元の南部のままか、もしくは八戸領に編入するかどうか二者択一を強訴した有名な願書が遠野三浦栄文書「当領主様御国替被仰付候手控」(二年正月付、『岩手県史』第六卷二〇五頁、森

嘉兵衛諸著作)にある。

(2) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七

(3) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七、市立図書館所蔵『弘前藩記事(草)』

(4) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七、市立図書館所蔵『弘前藩記事(草)』

(5) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七、弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事(草)』

(6) 野辺地への南部の百姓の参集の様子は青森の豪商伊東善五郎家の「家内通観」に詳しい。

正月十八日

南部ノ百姓東京江二千人斗相登り、野辺地へ四五百人斗参り候旨、南部ノ御役人当処へ参着、惣督様江御届ケニ御座候。右ハ南部様ニ而是迄ノ知行二十万石被召上、奥州白石十三万石ニ而替地被仰付候而、南部御領地ハ信州松代真田様、濃州大垣戸田様ト当津軽様御三家様ニ而□□取締被仰付候処、右百姓の願上ニハ七万石は差上候へ共、是迄ノ領地盛岡城付ニ而十三万石被下度、尚又御取締ハ何れノ御家ニ而不苦候間、○津軽様ノ御取締は御免被仰付度旨願出ノ由、東京へ罷出候百姓は東京へ□□候へ共、野辺地へ参り候百姓は同所へ此節詰合ノ備前藩へ願書差出、当青森ノ惣督様へ被取次呉候様願出候へ共、備前藩ニ而取次不仕、願書相帰シ候由ニ候。此後如何可相成哉難斗候。仙台様等其外会津・米沢・庄内等ノ模

様其外ノ処一向ニ此節承り不申候。(傍点は筆者、『青森市史』第七卷)

(7) 森嘉兵衛『旧南部藩に於ける百姓一揆の研究』は、「津輕藩はもと南部藩の陪臣であつたものが主家に弓を引き独立した藩であり且つ種々の経済的葛藤から、事毎に領民相争ひ數百年來犬猿も只ならざる關係にあつた。従つて今朝廷の命とはいへ津輕藩の管理に従ふ事を喜ばず、猛然蹴起して各所に一揆強訴をなした。その熱意は到底盛岡近郷、東海岸地方民の形式的一揆と異なり歴史に生くる民衆の雄叫であつた。」と記している。

(8) 南部領民の国替反对運動について、守屋嘉美「幕末維新期の東北」(『歴史』第四三・四四輯)は次のように論じている。

維新政府の政治的圧力に対する士族の批判が強められ、かつ、農民からの収奪が強化される時、知行主と農民との支配隷属關係や、商人・高利貸・實地地主にまつわりつく農奴主的性格が諸階層間の連繫をもたらし、これが国替反对運動をほぼ全領にまたがって展開させた原因であるとする。

(9) 太田弘三「三戸名士列伝」(『三戸高校郷土研究』第二号復刻所収)の川村隼太小伝によると、「藩主白石転封に際し三戸以北は津輕越中守取締となりたるを憤慨し馬に鞭ち野辺地に至り飯田記代七治道七戸野辺地弘志五戸円子左右見を説き陳情書を調整し各町村総代人百二十余名連署捺印して奥羽使に提出す津輕藩取締を解き黒羽藩の取締に変更したるは先生の力

多きに依る」とある。

四、弘前藩の辞任運動と取締罷免

このような南部領三郡の猛烈な反对運動に対して弘前藩はその対応策を東京出役の神東太郎を中心に考えた。

弘前藩は当初より南部領取締は歓迎すべき事ではなかった。

「今此ノ朝命アルニ違フ。名譽ハ則チ名譽ナリ、光榮ハ則チ光榮ナリト雖、此際若シ選任其人ヲ誤リ、施政其宜キヲ得サルアラハ、名譽光榮瞬間ニ一変シテ反对ノ結果ヲ奏スヘシ。今般ノ舉、実ニ我藩ニ於テ毀譽榮辱岐ル、処ノ一大重事ナラスヤ。幸ニ選任其人ヲ誤ラズ、布政其宜キヲ得ルトスルモ、治下ノ頑民尙朝廷一視同仁ノ聖謨ヲ奉スルヲ知ラス。偏ニ目前ノ感情ニ制セラレ、或ハ言フヘカラスルノ変ナキモ亦保スヘカラス。」⁽²⁾

と南部領支配を危惧していたのであった。

ところが、この危惧が現実のものとなって弘前藩中を動揺させたのである。三郡領民の津輕排斥運動が南部領取締の意欲を強く阻止した。正月二七日付と同二八日付の東京よりの内状書は、弘前藩の南部領取締についてその統治困難さを訴えている。

「南部地者段々申上候通仇怨之因兒女迄ニも染ミ込居り、若弊藩之兵ヲ以彼の地を治る時者、頑民共ニ相謀り、每事故障を申唱、布告教諭を不用、御政体を妨ケ、弊藩之瑕疵を斗候様ニ而者実ニ大難事ニ御座候而、何程尽力致し候而も、速ニ撫育安民之治功も奉奏兼

可申」(正月二七日付神東太郎内状書)⁽³⁾

「何地ニ而も兵乱後之事ニ而、古主を慕候儀十分之情容易ニ難治御一難事之旨被仰越、御尤之事存候」(正月二八日付神内状書)⁽⁴⁾

神東太郎は南部領取締について、万一弘前藩に不都合を生じ、藩主の御不勤にもなれば一大事である。そこで、南部領取締の辞退を願ひ出て、別に替地を賜わろうと陰に陽に政府要人に働きかけた。

当初、取締辞任をひそかに内願したところ、朝命に反することになるといので辞任は認められなかった。

「(南部の民政取締は)何程尽力致し候而も速ニ撫育安民之治功も奉奏兼可申、左ニ而者天朝無限之御仁沢彼地へ徹底不致候而者実ニ恐入候次第ニ立至り可申等後日内願之手筈ニも可相成」(正月二七日付神内状書)⁽⁵⁾

「民政御取締地所南部家旧領之内御引渡之義ニ就而者、追々御家之御不都合を醸し、万ヶ一御不勤ニ被為成候而者御一大事之旨被仰聞、御替地周旋之義被仰越候得共、先使山形修助を以得御意候通、地所御免御願立之義者勿論御繰替地之義茂源次口上振ニ而ハとても見込も無之候間、取運ハ出来兼候」(二月一二日付神内状書、傍点⁽⁶⁾は筆者)

そこで、東北戦争の軍事責任者で当時兵部大輔であった大村益次郎を訪ねて政府への斡旋を依頼した。神は津軽と南部の旧怨の関係を語り、更に現今の弘前藩の実状と南部領民の反対運動について申し述べた。

「他日、参政神東太郎事ヲ以テ東京ニ在リ。幸ニ大村兵部大輔君

ニ往来スルヲ得タリ。一日大村問フニ我藩ト盛岡藩トノ事ヲ以テス。神氏るる之レニ答へ、併テ語ルニ両藩目下ノ景情ヲ以テス。大村聞テしゆくしゆくタリ。即チ日、此事等閑ニ付スヘカラス。而シテ我力職之レニ与ラス。望ミラクハ大原殿ニ拝謁シ、其事情ヲ述テ可ナラン。」⁽⁷⁾

大村より東北諸藩掛の大原重実を紹介され、大原氏に強力に陳情請願した。⁽⁸⁾

「之レヲ其向ニ依テ替地ノ御沙汰ヲ願ハン乎。難キヲ遁レテ、朝命ニ依違スルノ恐アリ。或ハ鉗黙事ニ従ハン乎。鎮撫若クハ其効ヲ奉セサルノミナラス、或ハ恐ル主人施政ノ方向ヲ誤ルアレハ、一朝廷ニ対シ申開ナシ、二ハ百事維新ノ今日朝廷威陵ノ消長ニ関係スルヲ以テ、此間充分ノ明察ヲ仰カザルヲ得ス」⁽⁹⁾

じゅんじゅんと弘前藩の苦悩を申し述べた。

また、弘前藩の手をも介して大原氏に働きかけた。大原氏の属臣に、津軽と南部の関係、南部領難治の理由等を述べ、大原氏への取成しを願ひ出た。

「御同殿難掌江御国南部之情態、並旧怨民心ニ染ミ入、難治訳柄逐一申述、治切茂他藩よりおくれ可申、其内頑民共を諭し、御鎮撫行渡兼候様被巧候様ニ而者御名之御不勤ニも相成、且朝威ニも相拘り、是ニハ一同当惑いたし居候間、兼而事情御含置被下候様御取斗可然被仰上呉候様懇切ニ頼置候」⁽¹⁰⁾

当時新政府は東北諸藩の没収地の民心掌握をいかにはかるかということが最大の関心事であった。それは、政治的に東北諸藩の藩体

制を内部から切り崩すにあたっても、経済的に新政府の財源を確保するにあたっては、ひいては国内統一の基礎を固めるにあたっても東北地方の民心安定は必要なことであつた。

そのことは、東北戦争直前の七月一七日に奥羽民政取調担当の木戸孝允が大久保利通宛書状にて「東北府県之処已に々々御手之相立候処は免も角モ、実に新付之地は人心之居合肝要至極に付^⑪」と述べていることにあらわれているし、元年二月七日の奥羽分国の布告に「奥羽両国ハ広漠僻遠之地ニシテ古来ヨリ教化洽ク難敷及儀モ有之候ニ付、今般両国御取調之上府県被設置、広ク教化ヲ施シ、風俗移易、人民撫育之道厚ク御手ヲ被為尽度」と記され、更に、同日奥羽民政取締諸藩に達せられた布告に「兵乱之余人民愁苦之情態追々被聞召深く被為痛聖念候ニ付……人民撫育ニ厚ク心を用」と記されていることや、二月二三日の「諸藩取締奥羽各県当分御規則」が民心安定を主眼としていたこと、更にまた、二年二月二〇日発布の奥羽人民告諭が「百姓とも何の弁別になく彼是騒動いたし候ては誠に相すみ難きのみならず、いよいよ領主の罪をまし、此の上御沙汰に及ばれ候様なり行候ては、都て領主の迷惑となることなれば、其方ともよく此の道理をわきまへ、必さわき立ち申ましく候」と述べていることに如実にあらわれている。

このような時に、津軽支配に反対する領民の激しい運動が公然とおこり、領内が騒然としている状態は新政府においては好ましいことではなかつた。^⑫ しかも、取締の任にあたる弘前藩が統治に自信をもてず、新政府に辞任を働きかけるといふ状態であつてはなおさら

のことであつた。

二年二月九日、政府は次のような布令を発して弘前藩の南部領取締の罷免を伝えた。

「二月九日 於東京大原少将殿より御渡書付与

津軽越中守

先般南部彦太郎旧領取締被仰付置候処右今般被免候事

但先達而御渡之郷村高帳返上可致事

二月

行政官」

ここにおいて弘前藩は「一藩君臣ヲ挙テ初テ多日の憂鬱ヲ消スルヲ得ル」こととなつたのである。

しかし、南部領取締辞任の念願は達成されたが、南部領に代わる替地は沙汰されなかつた。そのため、東京在勤の神らは慌てた。これは弘前藩に何か不都合があつたからではなからうかと考えたのである。そこで、大原氏や弁事役所の役員にその事情を尋ねた。

二月一二日付東京発書状は神らの狼狽ぶりを次のように書き記している。^⑭

「九日御呼出ニ而南部旧領民政御取締地所御返上之上御免被為蒙仰候旨御達ニ相成、外ニ御替地等之御沙汰も無御座候間、不一通心痛いたし候。南部御父子護送之兵隊茂遅延之上御免御願立、昨春已来応援並御征討ニ就而之出兵も程能来兼、其上地所江迄姑息いたし候事ニ御下ケ墨ニ而被仰出候事与実ニ寢食茂不安、九日夜中ハ朝迄一眠も不致」

その問合せの結果、大原氏は、「御名様ニハ聊御不都合御座候而御免ニ被為成候義ニ者毛頭以無之候間安心可致」と言つて、心配なしと告げ、弁事役人は「御藩より御国南部旧怨も有之容易ニ御鎮撫無之段御説得之方有之由、右之所より朝廷ニ而茂御再評ニ相成、此度之御沙汰ニ及候由申居候旨、御替地之義尋候得者御取締地所御預ニ而多少之御入費も有之候間、松前事件ニ付莫大之御物入ニモ可有御座、御替地無之」と南部領罷免のいきさつを語つてその間の事情を論したので、神氏らの心配は解消した。

かくして、弘前藩は実際に南部領に赴任して、北・三戸・二戸三郡の土地百姓の交付を受ける前に罷免されたのである。弘前藩に代わつて南部領三郡の取締に任ぜられたのは、下野国黒羽藩主大関美作守であつた。黒羽藩はこの地に北奥県を建置して、三郡統治にあたることとなる。

注

(1) 盛岡藩でも津輕藩の取締が伝えられるや、軋轢を心配して、御家中諸士へ次のように達して不服を唱えないように戒めた。

「津藩旧領之内取締相蒙候ニ付而者朝命ニ候間其地之士民決而慮外無服等之儀無之様可致事」

「他藩ニ対し不敬等決而有之間敷津藩といへ共朝命相蒙取締いたし居候事故私怨を挾彼是当り候義者津藩ニ対し候訳無之対天朝不相濟事ニ候」

(青森県立図書館所蔵『近藤家文書』南部藩維新史料)

(2) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七

(3) 弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事』

(4) 弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事』

(5) 弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事』

(6) 弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事』

(7) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七

(8) 大原重実は尊攘派の公卿として活躍し、戊辰戦争には海軍を督し、また関八州監察使として功をあげ、新政府開庁後東京在勤を命ぜられ、公議所議長、制度取調御用掛を歴任した。

その後、酒田県知事、外務省七等出仕、外務少丞、外務省書記官に任じた。元年末当時は、元年九月一九日に弁官事に就任し、同十一月一日には東北諸藩賞罰取調掛に任じられて、東北諸藩の藩政を統轄していた。

(9) 史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七

(10) 弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事』

(11) 日本史籍協会叢書『木戸孝允文書』三一〇頁

(12) 奥羽諸藩の国替反対の嘆願運動に対して政府首脳は次のように考えて、その動きを警戒していた。

奥羽之民政漸々難渋之件出来、其上各藩逐々欲念発起軋封等之事をいとひ種々之手段をいたし困り申候。乍去一藩其謀を遂け候時は勿ら一統へ相響き申候間押し強く精々油断は不仕樣いたし申候。庄内南部之間は事に寄り申候と必一揆は相

起り可申敷と被相察申候。其始めを万一之節は相挫き候事肝要に而自然も失処致候而は忽ち処々方々へ波及に付、為念予め用意は仕置申候。至御煩慮候ほととの義は有之間敷と奉存候得共一応申上置候事（日本史籍協会叢書『木戸孝允文書』三、二四七頁）

盛岡藩の国替反対運動に対しては、政府は取締藩の松代・松本藩へ鎮撫を指示し、更に旧領主に鎮静を厳命している。

林半七へ達

南部彦太郎旧領真田信濃守戸田丹波守へ取締被仰付今般権知県事以下其地へ罷下り候ニ付、諸事申談鎮撫万端行届候様尽力可致旨御沙汰候事

南部彦太郎へ達

其藩儀先般出格至仁ノ思食ヲ以寛大ノ御処置被仰付候処、其後旧領農民共旧主愛慕ノ情実ヲ申立段々会計官等へ訴状差出し、且多人数徒党致シ、末家南部遠江守へ歎訴及ヒ候趣甚タ以如何ノ事ニ候。右ハ兼テ被仰出候書ノ御趣意ヲ奉体認、昨年以來ノ始末ヲ反省致候へハ此上朝廷へ奉対御配慮不奉掛様如何様ニモ鎮静方可有之事ニ候。其辺厚相心得此末不都合ノ次第無之様屹度取締致シ、早々城地引渡候様可致旨御沙汰候事（国立公文書館所蔵『太政類典』第一編第八七卷二月一〇日の条）

（13）史料館所蔵『己巳年間旧藩記事』第七

（14）弘前市立図書館所蔵『弘前藩記事』

終りに

本稿では弘前藩の南部領取締の経緯について煩多ではあるが、史料を引用することによって概観を試みた。

その経緯は、弘前藩は戊辰戦争の「勤王殊功藩」として隣藩盛岡藩三郡の取締に任ぜられたこと。これに対して、三郡領民の中から津軽取締反対運動が猛然とわき上ったこと。この動きは特権を奪われ、生活の途を断たれた下級士族層の煽動によって動かされた面もあったが、三郡領民の純粹な反津軽感情が大きな要素を占めていたこと。弘前藩は従来の盛岡藩との軋轢から当初から南部領取締に危惧を抱いていたこと。これが反対運動によって現実問題として表面化するにつれて、進退きわまり、とうとう新政府に取締辞任を強力に働きかけ、それに、成功したということ、であった。

ここには誕生して間もない新政府が自らの権力基盤を確保するために、いかに戦乱後の奥羽の安定をはかり、人心を収攬し、その支配機構の中に民心を包摂しようとしていたか明瞭にあらわれている。東北地方に本格的に県制度がスタートしたのは明治二年八月の一〇県設置からであったが、ここに至るこの過渡的時期に新政府がいかに地方統治策を考えていたか、その一端を垣間見ることができる。

その後、弘前藩取締に付された北・三戸・二戸の三郡は、黒羽藩取締地となり、北奥県と呼称されて、名実ともに中央集権的地方行政の一環に組み込まれていくことになる。

最後に、筆者の非力に終始多大の援助指導を賜った八戸市立図書館西村嘉氏、凡庸な筆者を文部省奨励研究に御推薦いただいた森

嘉兵衛先生に感謝申し上げる。

本稿は昭和五一年度文部省科学研究費補助金（奨励研究B）の助成を受けた研究の一部である。